

So, As, Alsoは三姉妹

——英語の語源と由来——

菅 沼 惇

目	次
はじめに	
1. Asは割れるか	
2. Soについて	
3. AsとAlso	
4. ドイツ語との関係	
5. So, As, Alsoは三姉妹	
おわりに	

はじめに

英語の語源。何という黴臭そうな言葉ではないか。私もその類いのものは余り興味を惹かれない。いやそれどころではない、むしろもっと積極的に知の門戸を閉ざしてしまおうとするようである。何故なのか？語源と言えば「文化史」偏向と言葉の端切れだからである。それも又それなりによい。ただ私が興味を惹かれようとするのはどうも純「語史」傾倒の語源の方なのだろう。

1. As は割れるか？

英語に非常に小さな語がある。色々あるが、その一つに ‘as’ という語がある。この非常に小さな語が二つに割れないだろうか？と空想^{おも}った者がいるだろうか？まさかそんなことはあるまい。そんなに小さな小さな語なのである。ところが実は、これが二つに割れるのである。もっと正確には、昔は二つの語に分れたものとして使われていたのであると言わなくてはならないが。

大自然の中にも色々^{色々}と珍種や化石があるが、「ことば」の森の中にも色々な珍種とか化石がある。博物学者が脚に巻脚絆を巻き腰に弁当を下げて山野に入り色々な標本を蒐集するのと同じような仕事を私も本の森の中でやっている。

‘as’ は二つの語の化石である。

2. So について

イギリスの昔, Anglo-Saxon人の時代に彼等はMod Eの 'so' のことを 'swa' と言っていた。例えば次の例等に見られる通りである。

(2.1) Hit wæs ða swa¹⁾ gedon. *Genesis*₁₋₉

(=It was then so done.)³⁾

(2.2) ⁊ he dyde swa. *Genesis* XLIV₋₂

(=And he did so.)

(2.3) Gyf se 'weg swa lang be. *Deutronomy* XIV₋₂₄

(=If the way be so long.)

(2.4) swa hwit swa snaw. *Numbers* XII₋₁₀

(=so white as snow.)

これらの例で使われている OE swa は次のようにパターン化することができる。

パターンA : $\begin{cases} \text{swa} + \text{V} \dots\dots\dots (2.1) \\ \text{V} + \text{swa} \dots\dots\dots (2.2) \end{cases}$

パターンB : swa + $\begin{cases} \text{Adj} \dots\dots (2.3) (2.4) \\ \text{Adv} \end{cases}$

そこで, このパターンAとBとからこれらの swa は副詞としての文法範疇で使われていたことになる。この OE swa は ME 期を swa 乃至 so という形態で通り,そして遂にMod Eのsoとなる。ドイツ語でも,(2.1)はMod Gerで,

Und es geschah so⁴⁾.

と言われる通りに, so [zo:] である。

3 As と Also

OE swa は上述のように副詞として使われる外に接続詞としても使われた。次のような例等である。

(3.1) He dyde swa hym beboden wæs. *Genesis* XLIV₋₆

(=He did as he was bidden)

(3.2) ƿ Iosue færð beforan eow, swa God spræc. *Deutromy*
XXXI₋₃

(=and Joshua goes before you, as God spoke.)

swaのこの使われ方をパターン化すると次のようになる。

パターンC: S + V----- swa S + V-----

ただこれは時として swa が swa swa と連続して使われることもある。次の例等の通りである。

(3.3) Abram ða ferde of Aran, swa swa God him bead, *Genesis* XII₋₄
(=Abram then went out of Haran, as God had bidden him.)

OE swa のこのパターンCでの使われ方は Mod E 'so'の使われ方ではない。Mod E ではこの使われ方は 'as' のものである。

先述の副詞の OE swa が Mod E で so であることは、そうであることの実事が見出されたら、その後は 'swa' が 'so' へ変化したのであろうことは形態論的にも推測がつき易い。ところが 'as' という語は OE 期には存在しなかった語なのであるから、'as' というのは一体何だろうかということになる。

OE では更に又このパターンCで swa の前に eal(=all)という語を置くことがある。強意のためであったであろう。私はそういうことを「英語の補強表現」と呼ぶが、これもその一つである。次のような例等である。

(3.4) Iacobes suna didon eal swa he him bebed. *Genesis* L₋₁₂
(=Jacob's sons did just as he bid him)

(3.5) ƿ hine man heng, eal swa he unc ær sæde. *Genesis* XLI₋₁₃
(=and men hung him, just as he said to us before)

このようにして使われていた eal swa が長い長い年月のうちにこの二語の間の僅かな空間 (Juncture) を埋めて行き、それぞれの語も段々と摩耗して行き、玉石となってしまい、ME期に also 乃至は als となり更に as となり果ててしまったようである。そして Mod E ではその as をそのまま受け継いで今日に至っているのである。後はもうこれ以上すり減ることもあるまい。

結局 as は2ヶの発音的突出部が依り合ってきた化石だったことになる。ではもう一方の also のことであるが、これは今上で as の由来を見てきたそ

の過程において派生されていた通りである。即ち形態論的には OE *eal swa* → *ealswa* → ME *ealswa* → *also* という変化の過程を経て *also* が派生されてきた。この変化は理解され易い。

ただ、次に *also* の統語的パターンについてであるが、これはそのように単純ではない。Mod E では副詞としてのみ使われていて単純であるが、古くは色々な統語パターンで使われていた。次の諸例等のようなものである。

(3.7)⁵⁾ *Ɔa cwæp se Hælend, Ga, and do eall-swa. Luke X*₋₃₇
 (=Then quoth the Saviour, Go, and do quite so.)

(3.8)⁶⁾ *Ɔa cwæp he eal-swa to ðam oðrum. Matthew XXI*₋₃₀
 (=Then quoth he quite so to the other.)

(3.9) *ic wylle ðysum ytemestum syllan, eal swa mycel swa ðe.*
Matthew XX₋₁₄

(=I will give this utmost man, quite as much as to thee.)

(3.10) *gewurðe ðe, ealswa ðu wylle. Matthew XV*₋₂₈
 (=be it don to thee, as thou wilt. Wycliffite Version)

これらの用例から *eal swa* 類の統語のパターン化をすると次のようになる。
 パターンA : S + V + *eal swa* …… (3.7) (3.8)

パターンB : *eal swa* + $\left. \begin{array}{l} \text{Adj} \\ \text{Adv} \end{array} \right\}$ + (*swa*) …… (3.9)

パターンC : S + V …… *eal swa* S + V …… (3.10)

これは先述のパターンA, B, Cの *swa* がそれぞれ *eal* をつけて補強されたことになる。

この (3.7) (3.8) の *eal swa* は Mod E の *also* とは異なる統語構造にある。厳密な検証の為に注5)6)に文脈を備えておいた通りだが、Mod E でも **Go, and do also* は非文である、*Go, and do so* が文法的文である。所謂「文を受ける代名詞的 *so*」がこれであるが、この (3.7) (3.8) の *eal swa* は正しくこの *so* の役割をなすものである。

パターンBでの *eal swa* は、こんなパターンの *swa* にまで *eal* がつくとは!?!と少し異様に響く程かもしれない。なおこの種のものには少し時代が下って

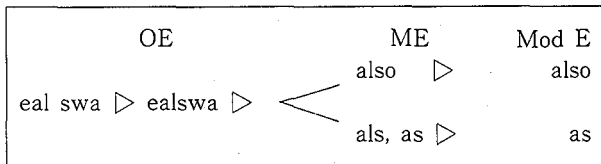
ME 期のものに次の例もある程である。

(3.11) For this .ye knowen al-so wel as I, *Canterbury Tales, The Prologue, l. 730*

パターンA, B, Cの三種とも Mod E の also では使われない。それならば Mod E の統語論上の also は何処から来たのであろうか？これは未だ厳密な実験と考察をしていないが、一応はこのパターンAとCからであろうと思っている。

又こゝに挙げた例では形態の特徴が eal swa, eall-swa, ealswa, also というように単一語への合一化への成り行きがよく見えている。

そして結局, as と also とは、源流は同じものでありながら段々と幾分異なる別々の語へ形成するという現象が時に語史上起るが——二重語(Doublets)——その一例だったのである。



4. ドイツ語との関係

上でOE eal swaがME also, alsを経てasとなって行ったと言ったが、こゝで一方ドイツ語のことが思い出されてくる。このalsoもalsも幾分か英語との間にニュアンスはあるものの正にドイツ語で使われている語（[alzo:] と [als]）でもあるからである。次の例のようなものである。先ずalsの例からである。

(4.1) und schuf sie als Mann und Weib. *Das erste Buch Mose I-27*
(=and shaped them as Man and Woman.)

(4.2) Und sie hörten Gott den Herrn,⁷⁾, als der Tag kühl geworden war. *Das erste Buch Mose III-8*

(=And they heard God the Lord,, as the day was become cool.)

このパターン(4.2)の als は Bibel にも頻用されている。

次に also の例である。

(4.3) Ist's nicht also? *Das erste Buch Mose* N₇

(=Is it not quite so?)

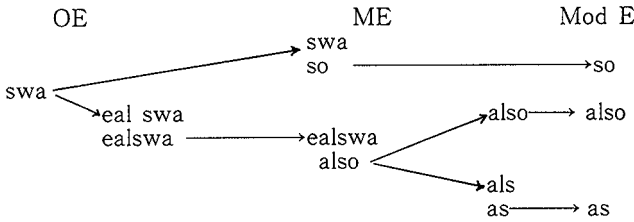
(4.4) ich denke, also bin ich. 木村・相良・独和辞典

(=I think, and so I am.)

ドイツ語でも so 自身が so, 又は Und so として英語でと同じように使われることは先に触れたが, この also はもう少し強意か又は同意味程度に使われているようである。こうしてくるとドイツ語でも all と so とが段々とくっついて行き, also と als とに分れて行ったのだろうかと思われてくる。ただドイツ語は as とまでは行かなかったのである。面白いものである。

5. So, As, Also は三姉妹

上の方で So から始まって Also を通り As までこのある英語の史的移り変りを色々な私が摘んだ標本をちりばめながら一つの話とした。結局は OE swa に始り ME swa→so となったり, 又 OE swa に eal が付き eal swa→ealswa となり ME ealswa→also となり又 Mod E also となったり, 又 ME also から als となって as となり Mod E as となったわけである。



Mod Eではそれと知らずに隣同志に並んでいたりすることもあるが, 長い長い間での変化でそ知らぬ仲になっているかもしれないが, 時を見て里見八犬伝よろしく名乗を挙げてよい三姉妹だったのである。

おわりに

語源の話し——ことばの史的科学——にも色々あるが, 今回は一寸異風味の文法的語源の一つのことをまとめてみた。

注

- 1) 下線は著者による便宜上の印である。
- 2) 以下全てOE訳聖書からの引用は *The Old English Version of The Heptateuch* による。
- 3) 現代英語訳は特に断らない限り全て著者による。
- 4) ドイツ語訳聖書からの引用は全て *DIE BIBEL, DEUTSCHE BIBELSTIFTUNG, STUTTGART, 1964*による。
- 5) この文の直前に次の文がある。 *ƒa cwæp he, Se ðe him mildheortnesse on dyde.* (=Then quoth he, The man that did a kindness to him.)
- 6) この文の前に次の文がある。 *ƒa cwæp he, Ic nelle; ----- eode ðeh syððan to ðam win-gerde* (=Then quoth he, I will not; ----- though went thence to the vineyard) 点線は原典のまゝである。
- 7) 点線は著者による便宜上の省略の印である。

引用・参考文献

1. *The Old English Version of The Heptateuch*, ed. by Crawford, S J, 1922.
2. *THE HOLY BIBLE made from The Latin Vulgate by J. Wycliffe & His Followers*, ed. by Forshall, J. & Madden, F., OUP, 1982.
3. *The Gothic & Anglo-Saxon Gospels in parallel columns with the Versions of Wycliffe & Tyndale*, ed. by Bosworth, J, London ; Reeves & Turner, 1888.
4. *THE PROLOGUE, THE CANTERBURY TALES* by G. Chaucer ed. by Skeat, W. W, Oxford ; Clarendon Press, 1963.
5. *CHAUCER'S CANTERBURY TALES THE PROLOGUE*, ed. by Ichikawa, S., Kenkyusha, Tokyo, 1934.
6. 木村・相良 独和辞典 博友社 1975.
7. *DIE BIBEL, oder DIE GANZE HEILIGE SCHRIFT DES ALTEN UND NEUEN TESTAMENTS nach DER ÜBERSETZUNG MARTIN LUTHERS*, DEUTSCHE BIBELSTIFTUNG, STUTTGART, 1964.